

ジョルディ・プジョル(1930年～)

Jordi Pujol i Soley (Barcelona 1930 -)

- 医者、政治家。カタルーニャ銀行の創設者、政党CDCの設立者。フランコ独裁後の最初の選挙によるカタルーニャ自治州政府首班(1980年4月24日～2003年12月16日)。



1

その生涯

- 1930年: 6月9日、バルセローナに生まれる。
- バルセローナ医学部を卒業、医学博士
- 1956年: マルタ・フェルソラと結婚、7人の子供をもうける。

2

内戦の終結と弾圧

- フランコ将軍は、共和主義・社会主義だけでなく地域ナショナリズムも激しく弾圧した。——→「赤」と「分離主義」の排除
 - 1938年～1957年、カタルーニャでは約3400人が処刑される。
 - フランスでゲシュタポによって逮捕されたクンパニイスも含まれる(40年10月に銃殺される)。
 - 自治政府役人約16000人の解雇
 - 多くの弁護士・医師の免許剥奪
 - カタルーニャ自治憲章を無効にする。
 - **カタルーニャの表徴**(州旗、州歌、政治・文化諸機関、サルダーナなど)を禁圧、カタルーニャのスペイン化をはかる。
 - 教育現場での**カタルーニャ語使用の禁止**、通り名や人名のカスティーリャ語化。 Cf. Joan⇒Juan Jaime⇒Jaime
 - 「方言」たるカタルーニャ語を「広告」に使用することの禁止
 - カタルーニャ語を「公的伝達」に使った市町村長は容赦なく解任された。
- ★こうした抑圧ゆえに、**カタルーニャ語文化**は「**対抗文化**」となり、地域ナショナリズムの大きな基盤となっていく。

3

- **第二次大戦末期の武装闘争**
 - フランコ体制の崩壊を期待
 - 1944年1月、スペイン共産党はアラン渓谷へのゲリラ(マキ)侵入を組織するが失敗
 - その後も散発的な活動——キコ・サバテ、カラクレマダなど。
- **カタルーニャ内部での抵抗組織の結成**
 - 古い政治活動家によるもの(39年のカタルーニャ民族戦線、45年のカタルーニャ社会主義運動、同年のカタルーニャ民主主義民族会議)
 - フランコ警察組織の弾圧のなかで影響力を広げることはず
- **政治活動の非合法化**
 - 既存の政党でひそかに組織を維持
 - キリスト教民主主義政党のUDC<カタルーニャ民主連合>
 - スペイン共産党につながるPSUC——50年代以後、とくに移民労働者のなかに支持を見出す。
 - 内戦以前に大きな力をもっていたERCはその影響力を喪失

4

カタルーニャ内部での新たな抵抗

- フランコによる国家カトリシズムの標榜
⇒カタルーニャ固有のものとされた言語=文化の同一性の表明が比較的自由に許された空間——カトリック教会とそれにまつわる行事
※内戦後の弾圧状況の中で、地域ナショナリズムの表明は、伝統的色彩を帯びざるを得なかった。
- 1947年、ムンサラット修道院聖母マリアの「即位」祝祭（この聖母はカタルーニャの庇護聖人とされる）
 - 大勢のカタルーニャ人が参列
 - カタルーニャの旗を振る光景が見られる。

5



6

カトリックのカタルーニャ主義者による反フランコ運動

- バルセローナ大学内に、「トラス・イ・バジャス」グループが生まれる。
 - カトリック的・保守的であると同時にカタルーニャの独自性を擁護する
 - 後に自治政府首班となる**ジョルディ・プジョル (Jordi Pujol)**もそのメンバーの中にいた。

7

- 1954年、ライモン・ガリがCC(キリスト・カタルーニャ)というグループを結成
 - **プジョル**はこの主要メンバーとなって、カタルーニャ主義の立場を強める。
 - ※「(カタルーニャの場合)かなりの程度まで言語からなる実在である」と述べ、カタルーニャ語復権をもっとも重視した。
- 1959年、反ガリンソーガのキャンペーン
 - スペイン偏重的な『ラ・バングアルディア』紙主幹ガリンソーガが、カタルーニャ語でのミサを侮辱した。
 - **プジョル**は、このキャンペーンの先頭に立った。
- 1960年、音楽堂事件(カタルーニャ詩人マラガイの生誕百年コンサート的事件)
 - 列席していたカタルーニャ人たちが、内戦後は禁じられていたマラガイの詩(「旗の歌 Cant de la senyera」)を歌う。それを組織した事で、**プジョル**らは治安当局に逮捕される。
 - プジョルは、7年間の禁固刑を受ける。
 - 2年半のサラゴサ監獄での獄中生活
 - 1年のジローナ市での拘禁

8

- 1954年、ライモン・ガリがCC(キリスト・カタルーニャ)というグループを結成
 - **プジョル**はこの主要メンバーとなって、カタルーニャ主義の立場を強める。
 - ※「(カタルーニャの場合)かなりの程度まで言語からなる実在である」と述べ、カタルーニャ語復権をもっとも重視した。
- 1959年、反ガリンソーガのキャンペーン
 - スペイン偏重的な『ラ・バングアルディア』紙主幹ガリンソーガが、カタルーニャ語でのミサを侮辱した。
 - **プジョル**は、このキャンペーンの先頭に立った。
- 1960年、カタルーニャ詩人マラガイの生誕百年コンサートの事件(音楽堂事件)
 - 列席していたカタルーニャ人たちが、内戦後は禁じられていたマラガイの詩(「旗の歌 Cant de la senyera」)を歌う。それを組織した廉で、**プジョル**らは治安当局に逮捕される。
- 第二回ヴァティカン公会議(1962年～65年)
 - ※これを契機に、教会は独裁と距離を置くようになる。

9

カトリック教会とフランコ体制の関係の変化

- 第二回ヴァティカン公会議(1962年～65年)
 - ※これを契機に、教会は独裁と距離を置くようになる。

10

● カタルーニャ語での文化活動の蘇生

- 1959年、ムンサラット修道院の支援で『セラ・ドル』というカタルーニャ語雑誌が刊行される
- 1961年、文化オムニウム（文化団体の意）が組織される——カタルーニャ企業家たちによる文化活動の援助
 - カタルーニャ語教育を求める請願を出して、63年から67年まで活動を停止させられる。
- 1961年、「十六人の判事」というグループによる「新しい歌 Nova Cançó」の広まりの先鞭をつける
- 60年代後半にはカタルーニャ語での書物刊行が次第に広まる
- 1969年～、『カタルーニャ大百科』の出版の開始
- FCバルセローナの活躍——地域意識を喚起

11

- 釈放後、プジョルは、父フルレンシ・プジョルが1959年に設立したカタルーニャ銀行（Banca Catalana）の経営を引き継ぐ。
- 一方で、文化オムニウムやカタルーニャ大百科などのカタルーニャの文化運動を後援
- 1974年：「カタルーニャ民主集中（CDC: Convergència Democràtica de Catalunya）」党の創設者の一人となる。
 - 総書記を務める。

12

カタルーニャ自治憲章の制定

- 1975年11月、フランコの死去
 - 民主化と自治を求める運動の拡大
 - 1976年9月11日、アリアス政府の不十分な対応への抗議として、内戦後はじめての大規模集会がサン・ボイ・ダ・リュブラガットでもたれる。
 - 1977年9月11日、バルセローナで、国内移民たちも加えて参加者じつに100万人を超える大集会がもたれる
 - ⇒「**民族自決**」と「**自治憲章**」の要求
- ⇒スアレス政府は、自治政府の復活を急ぐ
同年10月、亡命していた**タラデーリャス**がその首班としてバルセローナに帰還する。
- プジョルは、タラデーリャス自治州政府の参事(Conseller)を勤める。

13

● 自治憲章制定まで

- 1978年夏、カタルーニャ選出議員の委員会が自治憲章案作成作業を行ない、カタルーニャ国会議員集会で承認される。⇒「**サウ憲章案**」
- この憲章案は、国会審議にまわされ、(部分的に権限の削減された)自治憲章がつくられた。国会の承認を得て、1979年10月の住民投票で承認の後、1980年1月1日から施行される。⇒「**カタルーニャ自治憲章**」

★カタルーニャ自治憲章では、カタルーニャに「**自治地域**」ではなく、「**民族地域 nacionalitat**」(第1条)の名称が与えられて、1932年自治憲章から一歩進んだ。

★カタルーニャ語は、固有言語として**自治州公用語**と定められ、自治政府は、教育、文化、言語、情報通信の分野で広範な権限をもつにいった。

★しかし、治安や司法に関する権限は狭められ、自治政府予算にかぎりがあるなど、のちに中央政府と摩擦を生む原因を残していた。

14

● 政党活動の自由化

- 当初は、少数政党が乱立
- やがて幾つかの政党に結集
 - PSC(カタルーニャ社会党)
 - PSUC
 - ERC——少数派にとどまる
 - 民主中道連合——やがて解体
 - 国民同盟→国民党(PP)
 - CiU(集中と統一)——CDC<カタルーニャ民主集中>とUDC<カタルーニャ民主連合>の選挙連合、プジョルが率いる。
- 1980年、第一回カタルーニャ議会選挙
 - CiUが第一党となり、プジョルが自治州首班となる



★90年代まで、国政選挙ではPSCやPPが票を伸ばすのに対して、自治州議会選挙では地域ナショナリズム政党であるCiUが4割以上の票を獲得して、第一党の地位を維持した。
(プジョルは、1984年、1988年、1992年、1995年、1999年の自治州議会選挙に勝利する。)

15

プジョルの言語正常化戦略

- CiU主導のカタルーニャ・ナショナリズム
 - ERCの一部にみられるような独立のスローガンは斥ける
 - スペイン国家から漸進的に権限を委譲させようとする
 - とくに経済・財政政策、言語=文化政策における権限の拡大を目指す
- ★17自治州のなかで歴史的民族地域はほかの諸地域よりも広範な自治権をもつべきだとする主張から、「不均整な連邦主義」を目指しているといわれる。
- ★カタルーニャ・ナショナリズムは、バスク地方のナショナリズムと対比されるかたちで、**市民的(Civic)ナショナリズム**と評されるように、人種的スローガンや暴力的示威行動を退け、移民・流入者を排斥しない。
(20世紀はじめのナショナリストたちは、移民は「家の中の敵となる」としていた。)
- 固有言語の修得要求——抵抗のシンボルから民族=地域一体性確立・強化の道具へ
 - カタルーニャは、言語=文化的一体性を回復し保持しなければならない。
 - 「人や機関の出自、状況、起源」とはかわりなく、すべてのカタルーニャ人が「カタルーニャ民族」たる要件としてカタルーニャ語を修得すべきである。

16

● 言語正常化の促進

- 1983年、言語正常化法の制定

「全領域においてカタルーニャ語使用の正常化を促し、現在の言語的不平等を克服する」 Cf. **ダイグロシア状態**

⇒自治政府は、言語=文化的インフラ整備に大きな努力を払う。

★この論拠——国家公用語であるスペイン語の文化的・経済的圧力が地域固有言語の社会的機能をますます限定する方向で作用しており、固有言語を擁護するには行政による言語政策が不可欠である。

★教育現場での「言語漬け」政策

——効果は大きい

——スペイン語を母語とする住民の間からは反発も起こる

- 1998年1月、言語政策法の施行(言語正常化法を強化したもの)

★「言語規範」による地域言語使用の義務化・罰則化には反対の声も大きく、この点では法案修正を余儀なくされた。

17

言語と移民をめぐるプジョルの言葉

● 「カタルーニャをつくる」

- 「人や機関の出自、状況、起源」とはかかわりなくすべてのカタルーニャ住民は、「カタルーニャ民族」たる要件としてカタルーニャ語を学ぶ必要がある。

(J. Pujol, *Cataluña-España*より)

● 「カタルーニャ語とカタルーニャのアイデンティティを拒む者は、カタルーニャに受け入れられない。」

- これを拒む者には「寛容はいらない(tolerància zero)」。

(2001年10月1日)

18

プジョル首班の自治拡大戦略

- 82年7月にスペイン政府が制定したLOAPA(自治プロセス調整組織法)は、カタルーニャやバスク地方といった歴史的自治州だけでなく、新たにつくられる自治州にも前者にそれほど劣らない権限を与えることを可能にした。八三年二月までに全自治州が成立し、スペインは一七自治州からなる「自治州国家(エスタード・デ・アウトノミアス)」となった。この結果、自治権が民族的権利の保障であるのか、行政的な地方分権化であるのか、曖昧となった。
- これに対してカタルーニャでは、「言語・文化・カタルーニャ民族擁護の連帯の叫び」という団体が運動を強めるなどナショナリズム的反発が強まった。CiUのプジョルは、民族地域(ナシオナリダー)は他の諸地域よりも広範な自治権をもつべきだとする主張を掲げて、ナショナリスト的抗議の先頭に立った。一方、LOAPAに同調したPSOEにつながるPSCは、そのイメージを悪化させた。

19

- 80年代には中央政府のゴンサレス首相とジャナラリタットのプジョル首班とが自治権をめぐり対立する構図が続いたが、PSOEが93年総選挙で過半数を割ると、CiUは閣外協力をおこなうことにした。プジョルは、スペインの不安定な政局を利用して自治拡大を実現しようとしたのである。しかし十分な成果をあげない中央政府との協力はCiUの党内対立を引き起こし、95年カタルーニャ議会選挙では得票率を大幅に減らした。プジョルは同年末にPSOEとの協力を打ち切った。

20

- 96年総選挙では、保守の少数党であったAP(国民同盟)を中道政党PP(国民党)へと変えたアスナール党首が勝利して、一四年にわたるPSOE長期政権に終止符を打った。しかし単独過半数にいたらず、プジョルのCiUに閣外協力を求めざるを得なかった。引き換えにプジョルは、国庫から州に還元される所得税の割合を15%から30%にするなどの措置を勝ち取った。しかし景気が回復するなか2000年の総選挙で過半数を獲得したアスナール政権は、CiUの協力を必要としなくなったばかりか、スペイン・ナショナリズムの姿勢を強めて民族地域(ナシオナリダー)との間にさまざまな摩擦を引き起こした。
- だが、2004年3月の総選挙では、スペイン軍のイラク派遣が争点になるなかマドリードの列車爆破テロが起こり、PSOEに敗北を喫した。8年ぶりに政権に復帰したPSOEのサパテロ首相は、PPの民族地域(ナシオナリダー)との敵対的路線を修正し、あらためて国家と諸地域の関係の構築につとめることになった。

21

プジョルの引退と新たなジャーナリタット

- カタルーニャではプジョルの中央政府との関係の躓きへの批判が生まれ、80年以来の長期政権の弊害も生じるなか、99年のカタルーニャ議会選挙ではかろうじてCiUがPSCの議席を上回って政権を維持した。
- 2003年の選挙ではCiUとPSCがともに議席を減らしながら拮抗するなかでPP、ERC、そしてPSUCを継承するICVがそれぞれにキャスティングボードを握るという複雑な関係になった。最終的にはPSC、ERC、ICVの連立となり、**PSCのマラガイ**が新たなジャーナリタット首班に選ばれた。
 - プジョル引退後のあとを託したアルトゥル・マスの敗北。

22

〔プジョルの著作〕

- *Construir Catalunya*, Barcelona, 1965; 2 ed., Barcelona, 1980.
- *Una política per Catalunya*, Barcelona, 1976.
- *La immigració, problema i esperança de Catalunya*, Barcelona, 1976.
- *Des dels turons, a l'altra banda del riu. Escrits de presó. Entre l'acció i l'esperança*, Barcelona, 1978.
- *Construir Catalunya*, 1979.
- *Als joves de Catalunya*, 1988.
- *Quatre conferències: analitzar el pasat per renovar el projecte*, Barcelona, 1990.
- *La força serena i constructiva de Catalunya*, 1991.
- *Pensar Europa*, 1993.
- *Tot compromís comporta risc*, 1997.
- *Passió per Catalunya*, 1999.

23

〔プジョルに関する参考文献〕

- Antich, J.: *El Virrei*, Barcelona: Planteta, 1994.
- DD AA: *Jordi Pujol. Un polític per un poble*, Barcelona, 1984.
- Costa, Pedro O.: *Jordi Pujol*, Madrid, 1977.
- Faulí, J.: *El pensament polític de Jordi Pujol*, Barcelona: Planeta, 1988.
- Lorés, Jaume: *La Transició a Catalunya (1977-1984): el pujolisme i els altres*, Barcelona, 1985.
- Porcel, Baltasar: *Jordi Pujol*, Barcelona, 1977.
- Riera, I.: *Llums i ombres de Jordi Pujol*, Barcelona: Angle Editorial, 2001.
- Wirth, Rafael: *Jordi Pujol, honorable corredor de fondo*, Barcelona, 1981.

24

【補足】カタルーニャの現状

- 「不均整な連邦主義(ファダラリスマ・アシメトリク)」、すなわちブジョルと同じく多民族国家内の民族地域(ナシオナリダー)の権限強化をめざすマラガイは、サパテーロ首相との関係を利用して、年来の課題であった自治憲章の改定を進めることになった。2005年9月、カタルーニャ州議会は自治憲章改革案を、PPをのぞく全政党の賛成での承認を勝ち得た。PPは同改革案にカタルーニャを「ネイション(ナシオ)」と位置づける条項があることに猛反発し、国会に付託された審議のなかでもこれが大論争を生んだ。結局、ジャンラリタット側は譲歩して、「ネイション(ナシオ)」を拘束力のない前文に移し、バスク地方のような独自の徴税権は諦めてかわりに国庫配分率を高めることで妥協した。新たな自治憲章は、PPのほかに州議会案の修正を弱腰とするERCが反対に回ったが、国会下院・上院を通過して、2006年6月の州民投票で承認された。

25

- こうしてカタルーニャ自治州は、憲法上の民族地域(ナシオナリダー)の規定を維持しつつ(第一条)、「カタルーニャ議会はカタルーニャをネイション(ナシオ)と定義する」という前文をもつ自治憲章のもとで、新たな歩みを始めることになった【注】。

【注】

カタルーニャによる「ネイション」規定を自治憲章に盛り込ませようという動き
⇒バスク地方、ガリシアばかりか、固有言語をもたない自治州にも**地域アイデンティティ**を強く意識させる刺激

★2006年5月、アンダルシア自治州議会は自治憲章改正案を可決。その中でアンダルシアは「ネイションとしての実態(レアリダー・ナシオナル)」をもつと定義。

26

- 現在ヨーロッパの諸国家・諸地域は、ヨーロッパ外からの移民・流入者の増大を前に、多文化・他民族状況のなかで「統合」のあり方を模索している。新自治憲章のもとでカタルーニャは、どのように多文化交流(インテルクトゥアリタット)政策を進めていくのだろうか、ネイション(ナシオ)を主張する一つの地域「カタルーニャ」の今後の展開に注目したい。